

ヘンデル《メサイア》のディクション研究 — 英語学と音楽学からのアプローチ —

A Study of English Diction in Handel's *Messiah* : From English Linguistic and Musicological Points of View

舩 山 陽 子

MOMIYAMA Yoko

In this paper a method of identification of English diction is proposed from an interdisciplinary point of view, dealing with Handel's *Messiah* as an example. Diction is defined as a method of pronouncing the words of vocal works. In the case of *Messiah* there are many corrections and comments left since it was composed, which offer a wealth of valuable information about the state of the English language at that time. Taking this information into account, the diction intended by Handel to be performed is identified, using not only the results of English historical linguistics but also the movements in his works, that is, melodic contour, rhythm, and stress pattern, and his placing of syllables. This is a unique study with respect to its approach from the standpoint of both English linguistics and musicology.

キーワード：ヘンデル、メサイア、歌詞、ディクション、発音

Handel, *Messiah*, words of vocal works, diction, pronunciation

1. 序

英語学の研究によると、中世から近代にかけては、他の言語にも増して大きな発音の変化が進行中であったことがわかっている。ところが、ルネサンス期に印刷技術が発達し綴り字が固定されたため、それまで発音に従い変化してきた綴りが、その後の発音変化により発音と合わなくなり、当時の発音を特定することは困難になっている。特に最近の研究では、発音変化の大きな流れの中で、単語によって変化のタイミングが異なり、その過程で複数の発音が同時に存在していたとされている。したがって、声楽作品の歌詞についても、テキストのみでは当時の発音を同定することは不可能だと思われる。

音楽の演奏の方に目を移してみると、このような事情は、演奏家にはほとんど伝えられておらず、イギリスの声楽作品については、ディクション¹にはあまり関心が払われていないようである。数少ない先行研究²では、ルネサンス期までの作品のテキストについては発音の推定を試みて

いる例があるが、その後17世紀後半～18世紀の作品については、ほとんど扱われていない。

本論文は、以上のことを踏まえて、特にヘンデルの《メサイア》(1741年)を例に挙げ、複合的な観点からディクションを研究し発音を推定することを提案するものである。《メサイア》については、発表当時から現代まで、その歌詞付けに関して筆写者³や出版業者⁴や批評家などの修正⁵やコメントなどが残されていて、当時の英語の状況を考察する手掛かりとなる。それらも参考にしながら、歌詞テキストについて、英語史の研究成果に基づき発音の考察をし、複数の発音の可能性がある箇所については、旋律の音型・リズム・抑揚や音節の音価の割り振り方を基に分析を行い、発音候補の絞り込みを行う。

2. 《メサイア》のディクションに関連する先行研究

《メサイア》におけるヘンデルの歌詞付けについて、不自然な現象がみられることは一般に知られている(三澤2007:192-193)。しかし、《メサイア》に関する評論は数多くあるが、ディクションと英語学を関連させて論じたものはない。ここでは、歌詞付けの項目を立てて論じている現代の研究を2点取り上げる。

2-1 1969年のトビンJohn Tobin (1969)の研究

John Tobin (1891-1980)は、自筆譜とそのほかの写本、出版譜などを比較し、ヘンデルの想定していた音楽が、その後人々の演奏の都合などでさまざまな誤った解釈がされてきたことなどについて考察している(1969:135-148)。

まず、イギリスに移住する前に住んでいたイタリアの言葉からの影響として、イタリア語の連声(elision)の技法を用いて、音楽の流れが言葉によって切れてしまうことを避けていると述べている。合唱〈And the glory, the glory of the Lord主の栄光がこうして現れるのを〉の場合を例にあげると、譜例1のように、Glory andの-ryとand, glory ofの-ryとofがそれぞれ1音に割り振られ、繋げて発音されている。

次に、母語のドイツ語の影響として、were, these, thoseが、1音節として扱われている場合と2音節として扱われている場合があること、すなわち、語尾のeを発音するように書かれていることを述べている。

また、音節配分によるリズム形成として、ヘンデルの歌詞付けについて、彼の音節配分は、歌詞の意味を正確に表現するリズムを形成しているので、結果として間違ったアクセントとなってしまう場合がしばしばあると述べ、歌詞付けを変える場合もそのリズムを壊さないようにしなければならない、と述べている。ここで、トビンはアクセントが正しくなるように歌詞を変更することは認めている。例えば、譜例2のアリア〈The trumpet shall sound and the dead shall be rais'dラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ〉の中のrais'd incorruptibleという語句の箇所、ヘンデルは8分音符を4個・2個・3個のまとまりに分けてスラーをかけている。ところが、corとti

に強勢があって、英語としては不自然に聞こえるので、英語として許容されるように強勢を変える時にも、4-2-3のまとまりは壊さないようにするべきだとしている。ペーレンライター原典版によるトビンの修正譜では譜例12のようにそれが実現されている。

これらのトビンの記述についての問題点を挙げる。まず、イタリア語やドイツ語の影響で間違ったと解釈しているが、ヘンデルは積極的にイタリア語やドイツ語の特徴を英語に取り入れて英語表現の可能性を追求したと考えられる。また、アクセントが正しくなるように歌詞を変更することはヘンデルの意図からそれる恐れがある。フランス語に近い発音例が見られるが、フランス語の影響については記述されていない。さらに、wereなどが2音節として扱われている問題や、歌詞付けの音節リズムの問題については、英語の発達の過程で現代とは違う発音が存在し、そちらが採用されていたことに起因すると思われる。

2-2 1997年のバロウズDonald J. Burrows (1997) の研究

次に、現在のヘンデル研究の第一人者、バロウズ (1945-) の研究について解説する。バロウズは、《メサイア》について、彼のおかれた環境などに着目し、ヘンデルの行ったことは正しいと仮定して論を進めている。《メサイア》を作曲するまでに30年も住んでいた、母国となった国の言葉、英語は、毎日のコミュニケーションで使っていた言葉でもあり、そのアクセントや強勢パターンに鈍感であるはずがない、という立場をとり、ヘンデルの独特の歌詞付けから、積極的に英語をこう扱ってほしいという意志を読み取ることが必要だと述べている。

まず、音節数の問題について、次のように述べている。我々が通常発音すると思っているeの音を発音しないことがあること。例えば、譜例3のアリア〈Rejoice greatly, O daughter of Sion娘シオンよ、大いに踊れ〉ではcometh⁶を1音節として扱っている箇所がある。また、現代では発音しないeに音を割り当てているところもあると述べている。Surely を3音節、wereを2音節として扱っている (1743年版では1音節になっている) ことなどである (譜例4)。出版業者ウォルシュWalshの最初の版⁷ではwereを1音節に修正しているが、この点について、ヘンデルの演奏に関して直接の後継者は誰も何も修正していないのは、wereの第2音節に強勢をおかずにヘンデルのリズム運用を表現することが可能だからであろうとしている。

彼は強勢パターンにも言及している。トビンも取り上げていたことだが、譜例2のアリア〈The trumpet shall sound and the dead shall be rais'dラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ〉の中のincorruptibleという語の強勢が第2と第4音節にある。ウォルシュはその修正案を示しているが、これもまた楽譜通りに演奏したヘンデルの演奏に関して修正はないということである。この語について、台本作家のジェネンズJennens⁸も何も注文を付けていないので、現代では変に聞こえるけれども、当時は変ではなかったはずだとしている。

また、譜例5のアリア〈I know that my Redeemer liveth私は知っている、あなたを贖う方は生きておられ〉の中のfirst fruitsという語句に関しては、ヘンデルの扱い方が次第に変化している。最初は強強、次は弱強、その後強弱と、演奏ごとに強調したい箇所が異なってきたようだとしてい

る。

これらのバロウズの研究は、ヘンデルのスコアに寄り沿って考察するという点で、理に適っている。当時のincurruptibleの発音については、当時のイギリスでは宮廷でフランス語が使われ、フランス風の発音が認容されていた証拠となる。このincurruptibleを始め、wereなど当時違和感を持たれていた語について、ヘンデルの発音も存在していたであろうことはバロウズも認めている。この点については、英語学の研究から裏付けが取れる。

また、first fruitsの例のように、ヘンデルが歌詞の抑揚などを変えて演奏し試行錯誤しながらより効果的な表現を追求していたことは、他の表現についても考慮する必要があると思われる。

3. 英語学における、この時代の英語の扱いと研究の状況について

18、19世紀の英語はあまり研究が進まず、最近までイギリスの歴史言語学のシンデレラと呼ばれていた。つまり、17世紀までは発音の大きな変化などもあり多くの研究がなされて華やかに賑わっていたのが、12時ならぬ1700年を境に急に消えてしまうという意味である。それが、ようやく、21世紀に入るところからBeal (1999) やJones (2006) により、まとまった研究がなされるようになってきた。彼らは当時の乱れた発音を記述し「正しい」発音を示していた正音学者と呼ばれた人たちの記述について検証し、それらが現代の研究材料として有効であることを述べ、論を進めている。

この時代は、近代英語の時期で、語形は現代と同じ語形が使われるようになるが、まだ発音は変化のさなかにある。初期近代英語の大母音推移Great Vowel Shift⁹と呼ばれる長母音の発音変化はほぼ終わっているが、その変化の様々な段階の発音がまだ同時に存在していたと考えられている。特に、伝統的、保守的な話し方として変化前の発音が使われていた (Barber 1997)。

また、この時期は、ちょうど権力が王から議会へ移り、王侯貴族の言葉を踏襲しない中産階級の人々が台頭しつつある時期で、様々な言葉が存在する言語的な混乱状態にあったとAlgeo (2004 : 174) は述べている。そもそも、ドイツ・ハノーファの選帝侯から王位継承法に基づいて即位したジョージ1世George I (r. 1714-27)¹⁰は英国を好まず、ラテン語、フランス語、イタリア語は話したが英語を一向に解さず、話さなかったので、英語は宮廷を追われフランス語がこれに代わったと中島 (2005 : 35-36) は述べている。

ここで標準英語について説明しておく。16世紀に宮廷を中心とした話し言葉が上流階級や文化人や学校などで用いられるようになり、話し言葉標準語Spoken Standard Englishとして確立し、その後、書き言葉についても標準語Standard Englishが確立されたが、18世紀に、ヨーク、リバプールなどの都市、ロンドンおよびその周辺の教育ある中産階級の人々が権力を持つようになり、その言語がいわゆる容認標準語Received Standard、その発音が容認発音Received Pronunciationとして定着した。

このような発音の変化をまとめたものの一部が表1である¹¹。

(1) 終盤を迎えた大母音推移

(1-1) 長音のME[i:]は[ai]から多くの場合17世紀の間に[ai]になったが、まだいろいろな発音が存在している。(Algeo2004: 161)

(1-2) ME[o:]は、当時は[u:]、[u]、[ʌ]となっていたが、現在とは異なる発音であったものも多かったようである (Algeo2004: 161)。概ね19世紀から現代の発音が確立した (中島2005: 124)。

(1-3) ME[a:]は、標準英語ではおそらく18世紀の初期には[eɪ]となっていたと思われるが、[a:]のままの発音も残っている (Algeo2004: 162)。二重母音[eɪ]が確立したのは18世紀末 (中島2005: 121)。17世紀後半から18世紀初頭にかけてME[a:]とME[ɛ:]がともに標準英語で[e:]と発音されていたことがよく見られる (Barber 1997: 107)。

(2) その他の変化

(2-1) 語尾のrは今は[ə]と発音されるが、それはrの前にわたりの音が発達して[ər]となり、この[r]が標準英語では落ちて[ə]となっているのである。flower、tower、fireなどが[flau-ə(r)]、[tau-ə(r)]、[fai-ə(r)]と発達した (中島2005: 129)。初期近代英語の時期にはfireやflowerの語は1音節の発音と2音節の発音の両方が存在していたということである (Barber 1997: 120)。

(2-2) 強勢のある位置での強形と、強勢のない位置での弱形が異なった発達をしている場合、強勢のない位置では長母音が短母音になったり、子音が消失したりする。wereの場合、強形の[wɛ:r]が普通であった。現代でも聞かれることがある[wɛə]は、この強形から来たものである。現代英語で通常聞かれる発音は弱形の[wɛr]が変化した[wər]から変化してきたものである。初期近代英語期にはwereとbeareが押韻している例があり、この場合は[wɛə]と発音していたことになる (Barber 1997: 129)。

(2-3) 強勢について

初期近代英語では、-able、-ibleがつく語は、最初の音節に第1強勢が、末尾から2番目の音節に第2強勢があったという (Algeo2004: 168)。

(3) 階級の流動に由来する発音変化

標準英語を話す階級の流動につれて、次のように発音が変わっていった。(中島2005: 119)

ME[ɛ:]は[e:]→[i:]。

ME[oi]、[ui]は[ɔi]、[ai]→[ɔi]。

[ɑ:]→[ə:]。

4. 《メサイア》のディクシオンの分析例

以上の考察を踏まえて、さらに音楽構造や歌詞と音楽の関係を考慮することにより、実際にディ

クションの分析を行った。分析の例を以下に示す。

4-1 分析例1 「fire」のディクション

まず、譜例6のアリア〈But Who may Abide the Day of His Comingだが、彼の来る日に誰が身を支えうるか〉の歌詞中の「fire」のディクションについて分析する。この曲では、fireという語は、3音に割り当てられている場合が5例、1音に割り当てられている場合が3例、メリスマ的に伸ばす場合が1例ある。

fireという語の発音については16世紀から19世紀初めまでに、[fɛɪr]から[faɪə]へと変化したことが分かっている(中尾1979、他)。Dobson(1968)によると、[ɛɪr]から[aiə]への変化は、イギリスの北部の下層階級から始まったということである。変化後の[faɪə]の発音では3音の場合は歌えても1音で歌うのは困難である。したがってfireについて、ヘンデルは[fɛɪr]という発音を想定して作曲していたと考えられる。

このfireについては、ルネサンス期のマドリガル作曲家では扱いが分かれている。イギリス東部Norwich出身のトマス・モーリー Thomas Morley (1557-1602) のマドリガル〈Fyre, fyre〉(譜例7)ではfyre (=fire) という1語にこの曲全体を通して2音割り当てられているので、モーリーはこの語を[faɪə]と発音していたと考えられる。また、イギリス南部Sussex出身のトマス・ウィールクス Thomas Weelkes (1576-1623) のマドリガル〈Come, Shirrah Jack, Ho!〉(譜例8)ではfireに1音が割り当てられているので、ウィールクスは[fɛɪr]¹²と発音していたと考えられる。

ヘンデルは、モーリーより100年程時代は下るが、次期国王からイギリスに派遣されたことを考えると、下層階級から広がってきた発音の変化はまだ受けていない、宮廷の伝統的な英語を学んだと考えられ、fireを[fɛɪr]と発音していたと考えることは妥当であると考えられる。

譜例9のアコンパニャート〈Thus saith the Lord, the Lord of Hosts万軍の主はこう言われる〉のdesireという歌詞もメリスマで伸ばす音に割り当てられているので、同様に[deɪzɪə]と推察できる。

4-2 分析例2 「incorruptible」の強勢

次に、2章で取り上げたバロウズBurrows(1997)によるincorruptible(譜例2)に関する記述に関しては次のように説明できる。3章では英語の変化に関して以下の2点について検討した。

①国王が英語を話さないため、英語は宮廷を追われフランス語がこれに代わった(中島2005: 35-36)。

②初期近代英語では、-able、-ibleがつく語は、最初の音節に第1強勢が、末尾から2番目の音節に第2強勢があった(Algeo2004: 168)。

以上のことから、ヘンデルの発音は第1強勢については揺れがあるものの、incorruptibleの、末尾から2番目の音節、すなわち-ibleのiにアクセントが来るものだったと推定される。そして、そのフランス語風の発音は、おそらく宮廷英語の発音、洗練された発音として、イギリス英語の1つ

の発音パターンと容認されていたと考えられる。

4-3 分析例3 音画法の採用

譜例10の aria 〈Ev'ry valley shall be exsaltedすべての谷は身を起こし〉の and ev'ry mountain and hill made low で、mountain の ou の発音は [u:]、[əu]、[au] の3通りが考えられる。この山という意味の単語の音型が山型であることから、音画法を採用していると考え、緊張が持続する [u:] ではなく、緊張が最高点から緩む [əu] か [au] であると推定する。また、the crooked straight, and the rough places plain の、crooked の oo、rough の ou は、いずれも [ʌ]、[ʊ]、[u:] の3通りが考えられ、現在とは違った発音であった可能性もある。ここで、曲がったという意の crooked は、2～3音にスラーをかけた部分に割り当てられているので、crooked の oo は [u:] という発音だと推定する。でこぼこした、という意の rough の ou は、1音に割り当てられている場合が多く、ごつごつした語感になる [ʌ] と推定する。真っ直ぐの意の straight の ai と平らなの意の plain の ai は [ei] ではなく、平坦な響きの [e:] と推定する。

4-4 分析例4 「were」

譜例4の アコンパニヤート 〈And lo, the angel of the Lord came upon themすると、主の天使が近づき〉の中の were の発音については議論の多いところであるが、Barber (1979) などにより、当時多かった強形の [we:r] が変化して [weə] であったと考えられる。同時にヘンデルは、弱形の [wer] が変化して [wə] も想定していて、1音に割り当てられている1743年の演奏時には [wə] の方を採用したのだと考えられる。

4-5 分析例5

分析例1～4より、ヘンデルの発音は、当時の発音の中では概ね古い伝統的・保守的な発音を採用していると考えられることから、他に判定の手掛かりのない語については、伝統的な発音を選んで、ディクシオンを推定する。例えば、譜例11の aria 〈Rejoice greatly, O daughter of Sion娘シオンよ、大いに踊れ〉で、rejoice の oi は [əi]、speak、peace、heathen はそれぞれ [spe:k]、[pe:s]、[he:ðen] と推定される。また、4-3で分析した mountain の ou の発音は、[au] ではなく [əu] であると推定される。

5. 結語

ヘンデルは、次期国王からロンドンに派遣されたことを考慮するならば、伝統的な正統派の洗練された英語を学んだと考えられる。彼の発音やアクセントは、次第に主流になる中産階級の言葉とは異なっていたかもしれないが、ロンドンで活動していた彼は、自分と異なる発音も承知していたはずである。そのうえで、ヘンデルは音楽表現のために、当時理解しうる範囲で言葉の可能性を追

求しながら歌詞付けを行ったと考えられる。このようなことも考慮に入れ、最近になって漸く進んできた英語の発達の研究成果に加えて、音楽構造、歌詞と音楽との関係なども考慮することにより、作曲当時のディクシオンの推定がかなりの程度できることが実証された。

本研究により、18世紀のイギリス声楽作品のディクシオンについては、社会構造や音楽に関係する人々の階級が大きく影響していること、そして同時に異なる発音が存在する中、作曲家も受け入れる側も試行錯誤しながら音楽表現の可能性を追求していたこと、などが明らかになった。

今後は、ヘンデルの他の作品についてもディクシオンの分析を行い、時間の変化や社会構造の変化がディクシオンにどのような影響を与えているかなどを考察したい。また、ヘンデルが手本としたパーセルHenry Purcell (1659-1695) の作品にも取り組み、イギリス音楽の歌詞付けの流れの中に、ヘンデルを位置づけることを試みたい。それにより、英語の発音変化の影響がある中世から18世紀までの声楽作品について、ディクシオンの全体像が明らかになることが期待される。

- 1 一般にディクシオンという用語は、発音法に発声法、表現法まで含めた広義で用いられる場合 (LaBouff 2008: 3) と、狭義で発音法のみを扱う場合 (Adams 2008:xi) とがあるが、本論文では狭義の歌唱における歌詞の発音法のことと定義して用いる。
- 2 Alison Wray. 1995. "English Pronunciation, c.1500- c.1625." In *English Choral Practice 1400- 1650*. 90- 108. Edited by John Morehen. Cambridge: Cambridge University Press. と、 David N. Klausner. 1996. "English." In *Singing Early Music*. 13- 38. Edited by Timothy J. McGee. Bloomington: Indiana University Press.
- 3 John Christopher Smith (the elder) (1683- 1763) 、 John Christopher Smith (the younger) (1712- 1795) 父子。
- 4 John Walsh (the elder) (1665/66- 1736) 、 John Walsh (the younger) (1709- 1766) 父子ら。
- 5 Smith父子やWalsh父子は、ヘンデルの自筆譜を筆写あるいは出版する際に英語の誤りを修正していた。
- 6 動詞comeの三人称単数現在形の古い形。
- 7 John Walsh. 1749. *Handel's Songs Selected from His Latest Oratorios*.
- 8 Charles Jennens (1700- 1773).
- 9 15~17世紀の英語に起こった長母音の発音の変化で、長母音はみな一段ずつ高められ、高母音である[i:]と[u:]は[ai][au]と二重母音化された。
- 10 ヘンデルはジョージ1世がハノーヴァ選帝侯である時から彼に仕えていた。
- 11 なお、MEは中世の英語で、中英語と呼ばれている形、PEは現代英語のことである。
- 12 Weelkesの場合は時代が古いので[fɪ:r]という発音も考えられる。

譜例1 合唱 〈And the glory, the glory of the Lord主の栄光がこうして現れるのを〉



譜例 2

アリア〈The trumpet shall sound and the dead shall be rais'dラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ〉(それぞれ上段がヘンデルの歌詞付け。)

rais'd in-corpor-tible.
rais'd in-corpor-tible.

in-corpor-tible.
be rais'd in-corpor-tible.

in-corpor-tible.
be rais'd in-corpor-tible.

譜例 3

アリア〈Rejoice greatly, O daughter of Sion娘シオンよ、大いに踊れ〉

be-hold, thy King cometh un-to thee. cometh un-to thee.

King cometh un-to

譜例 4

アコンパニャート〈And lo, the angel of the Lord came upon themすると、主の天使が近づき〉

There we-re shepherds a-biding in the field, keeping

and they we-re sore a-fraid.

譜例 5

アリア 〈I know that my Redeemer liveth私は知っている、あなたを贖う方は生きておられ〉
 (上から順に、2回目の歌詞付け、最初の歌詞付け、Smith父の筆者譜、自筆譜最後の版。)

the first fruits of them that
 the first fruits of them that

the first fruits of them that sleep.
 the first fruits of them that sleep.

譜例 6

アリア 〈But Who may Abide the Day of His Comingだが、彼の来る日に誰が身を支えうるか〉

fire. - - - - - ner's fire. for

譜例 7・トマス・モーリー Thomas Morley (1557-1602) (東部Norwich) 〈Fyre, fyre〉

fy-er, fy - er! fy-er,

譜例 8・トマス・ウィールクス Thomas Weelkes (1576-1623) (南部Sussex) 〈Come, Shirrah Jack, Ho!〉

And some fire! Haste.

譜例9 アコンパニヤート 〈Thus saith the Lord, the Lord of Hosts万軍の主はこう言われる〉

shake. and the de-sire of all

譜例10

アリア 〈Ev'ry valley shall be exsaltedすべての谷は身を起こし〉

ed. and ev'ry moun-tain and hill made low.
the crook-ed straight. the crook-ed straight and the rough places plain.

譜例11

アリア 〈Rejoice greatly, O daughter of Sion娘シオンよ、大いに踊れ〉

Re-joyce. re-joyce. re-joyce
and He shall speak peace un-to the hea-then. He shall speak

譜例12

アリア 〈The trumpet shall sound and the dead shall be rais'dラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちないものとされ〉 トビンによる修正譜

dead shall be rais-ed in cor-rup-tible.

表 1

標準英語の発音変化表 (抜粋)

| ~ 1300 (ME) | 1400 | 1500 | 1600 | 1700 | 1800 ~ 現在 (PE) | | | | | | | |
|--|--------|-------|-------|---------|----------------|-------|--------------------------|--------------------------------|----------------------------|--------------------------|---------------------------------|---------------------------------|
| i: (=ii) | | əi | | æi | | ai | wife, mice, light, child | | | | | |
| o: | | u: | | u | 唇の子音の後 | | u | much, such, judge | | | | |
| o: | | u: | | u | | | u | shook, cook, rook, look, bosom | | | | |
|Λ. (17CにΛと発音された記録があるgood, stood, hood, foot, took, wool.) | | | | | | | | | | | | |
| o: | | u: | | u | | Λ | | Λ | blood, flood, glove, month | | | |
| ɑ: | | æ: | | ɛ: | | ɛ: | | ei | take, name, haste, away | | | |
| ɛ: | | 標準e: | | | | i: | 乗換 | | i: | stream, dream, heat, sea | | |
| ɛ: | | e: | | 短縮e (ɛ) | | | | e (ɛ) | | e (ɛ) | dead, bread, thread | |
| ir | | | | air | | (æiə) | | aiə | | aiə | fire, desire, iron | |
| u: | (uu) r | | | aur | | | | auə | | auə | hour, flower, tower | |
| ɛ:r | | | | | | | | ɛə | | ɛə | bear, wear, swear, where, there | |
| ai<oi> | | | | | | | | i | (綴字発音) | | i | boil, join, boy, joy, voice, |
| er | | ar | | ær | | ær | | ɑ: | | ɑ: | | learn, servant, service, heard, |

参考文献

Adams, David. 2008. *A Handbook of Diction for Singers: Italian, German, French*. New York: Oxford University Press.

Algeo, John, Thomas Pyles. 2004. *The Origins and Development of the English Language*. 5th edition. Boston, Mass.: Thomson Wadsworth.

Beal, Joan, C. 2002. *English Pronunciation in the Eighteenth Century: Thomas Spence's 'Grand Repository of the English Language'*. Oxford : Oxford University Press.

Barber, Charles. 1997. *Early Modern English*. Edinburgh : Edinburgh University Press.

Burrows, Donald. 1997. *Handel: Messiah*. New York : Cambridge University Press.

Dobson, E. J. 1968. *English Pronunciation 1500- 1700*. 2 vols., 2nd ed. (re-issued 1985). Oxford: Oxford University Press.

Jones, Charles. 1989. *A history of English phonology*. New York: Longman Inc.

_____. 2006. *English Pronunciation in the Eighteenth and Nineteenth Centuries*. New York : Palgrave Macmillan.

Kayes, Gillyanne. 2004. *Singing and the Actor*. Second Edition, London: A & C Black Publishers Limited.

LaBouff, Kathryn. 2008. *Singing and Communicating in English*. New York: Oxford University Press.

Larsen, Jens Peter. 1972. *Handel's Messiah*. 2nd ed. New York: W. W. Norton & Company, Inc.

Shaw, Watkins. 1965. *A Textual and Historical Companion to Handel's Messiah*. London: Novello and Company Limited.

Tobin, John. 1969. *Handel's Messiah. A Critical Account of the Manuscript Sources and Printed Editions*. London: Cassel & Company LTD.

Uris, Dorothy. 1971. *To Sing in English.: A Guide To Improved Diction*. New York: Boosey and Hawkes.

荒木一雄, 2001 「Joan C. Beal *English Pronunciation in the Eighteenth Century : Thomas Spence's 'Grand Repository of the English Language'* Oxford: Clarendon Press 1999 xii + 239pp.」『近代英語研究』第17号、105- 111.

宇賀治正朋, 2000 『英語史』開拓社。

熊木晟二, 2009 『ヘンデル《メサイア》必携：用語の解説と演奏・発音のポイント』教育出版。

ジェイコビ、ピーター、1989 『《メサイア》とヘンデルの生涯』熊木晟二、玉田由紀子訳、日本基督教団出版局。

- スミス、ルース、2005『チャールズ・ジェネズ《メサイア》台本作家の知られざる功績』赤井勝哉訳、聖公会出版。
- 中尾俊夫、1979『英語発達史』篠崎書林。
- 中島文雄、2005『英語発達史 改訂版』岩波書店。
- パロウズ、ドナルド編、2009『ヘンデル創造のダイナミズム』藤江効子、小林裕子、三ヶ尻正訳、春秋社。
- ホグウッド、クリストファー、1991『ヘンデル』三澤寿喜訳、東京書籍。
- 三ヶ尻正、1998『演奏者・鑑賞者のための「メサイア」ハンドブック：発音・文法・解釈・日本語訳・バージョン』ショパン。
- 三澤寿喜、2007『ヘンデル』音楽之友社。
- 山田由美子、2009『原初バブルと《メサイア》伝説—ヘンデルと幻の黄金時代—』世界思想社。

楽譜

- Handel, George Frideric, Friedrich Chrysander. 1969. *Messiah; the original manuscripts in facsimile*. New York: Da Capo Press.
- Händel Georg Friedrich, commentary by Donald Burrows. 2008. *Messiah: HWV 56: autograph*, the British Library, London / Kassel: Bärenreiter. (Documentamusicologica, 2. Reihe . Handschriften-Faksimiles; Bd. 40)
- Handel. 1992. *Messiah*. Edited by Watkins Shaw. London: Novello & Company Limited.
- Handel, George Frideric. 1998. *Messiah*. Edited by Clifford Bartlett. Oxford: Oxford University Press.
- Händel, Georg Friedrich. 2003. *Messiah*. 4th impression. Edited by Kurt Soldan, Donald Burrows. Frankfurt : C. F. Peters. (First Edition 1987)
- ヘンデル、G.F.、1990《メサイア》ベーレンライター原典版 (BVS-3)、全音楽譜出版社。(Handel. 1972. *Der Messias. Oratorium in der drei Teilen*. Herausgegeben von John Tobin. Klavierauszug von Max Schneider.)
- Ledger, Philip, ed. 1978. *The Oxford Book of English Madrigals*. Oxford: Oxford University Press, 27- 41.